

氏名	今村 淳
学位の種類	博士（文学）
学位記の番号	甲第 207 号
学位授与年月日	2017（平成 29）年 3 月 20 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	「美的相関性」と「響存」 一人間の倫理的生のあり様—
論文審査委員	主査 山田 忠彰 （相関文化論専攻 教授） 副査 奥波 一秀 （相関文化論専攻 准教授） 副査 朴 倍暎 （相関文化論専攻 准教授） 副査 佐藤 康邦 （東京大学 名誉教授） 副査 小松佳代子 （東京藝術大学 准教授）

## 論文の内容の要旨

### 序論

本論の目的は、異領域・異分野間の「相関性」のあり様に関する論究を通して、多元化をきわめる現代の世界（社会）環境のなかで、異なるもの同士の共存の実現を図る可能性を芸術-倫理的観点から論理的に検討することである。異なることが当然視される世界（社会）のなかで、互いの差異の対置によって引き起こされる「相関性」がどのような人間-社会的有意義性を孕んでいるのか。このような問題意識のもとに、本論では、異なるもの同士間の「相関性」のあり様そのものを、「芸術的なもの」、「美的なもの」と捉えて、〈自己〉とは異なる〈他者〉との「美的相関性」の実現の可能性について究明をおこなう。この試みにおいて、〈自己〉と〈他者〉との関係を、さまざまな異なるもの同士の関係性に捉えなおして、異なるもの同士間の「美的相関性」の諸相を浮き彫りにしてゆく。

そこで、まず、「美的相関性」のあり様そのものといえる、人間の倫理的生の遂行を、異なるもの同士の「響存」（本論筆者の造語）と捉えかえして、この造語を着想するきっかけとなった、〈他者へのまなざし〉をみずからの芸術思想の基盤におく、フランスの現代音楽家ピエール・ブーレーズ（1925-2016）の（音楽作品よりはむしろ）思想を中心に考察をおこなう。次に、ブーレーズと共鳴する考え方もつ19世紀から20世紀にかけての芸術家および思想家を各章において取り上げてゆく。異なる時代と社会に生きつつも、彼らの芸術思想に共通するものは、新たな〈自己〉の創造に先だつてつねに先在する〈他者〉へとむかい続ける、〈芸術的人間〉による〈他者へのまなざし〉である。それこそは、〈自己〉とは異なる〈他

者)との「美的相関性」のあり様としての「響存」(異なるもの同士の倫理的な共存)、すなわち、人間の倫理的生=美的生の実現可能性の条件にほかならないのである。

## 第一章 〈自己〉と〈他者〉の「響存」

本論筆者の造語「響存」とは、異なる個々が差異を融合して一体的に存在することではなく、個々が互いの差異を客観的に対置しあい、それぞれを響きあわせながらともに存在する、という意味をもつ言葉である。この「響存」は、もともとは、「輝き」の意味をもつフランス語の「エクラ éclat」という言葉から着想されたものである。この「エクラ」は、ブーレーズの著作および彼の楽曲の表題として用いられている言葉である。ブーレーズの著作『エクラ／ブーレーズ』では、彼との対話と、いくつかの寄稿や引用文が交互に散りばめられており、そして、それらをさらに読者(〈他者〉)が「読む」という行為によって、新たな「反射／反響」を生み出すことが期待されている。また、彼の楽曲《エクラ》も同様のコンセプトをもっており、これらの両作品に見られる、異なる〈他者〉との「相関性」のあり様は、先在するものごと(〈他者〉)を原理的に問いなおす「再考」を通して、新たな〈自己〉の存在の創造を掌るキーマカニズムとして捉えられるものである。それは、まさしく〈芸術的人間〉による、〈他者へのまなざし〉を介して、先在する〈他者〉からの「演繹」を図るという芸術的行為のあり様そのものにほかならない。ブーレーズによるこの「演繹」という操作は、ブーレーズとの強いシンパシーで結ばれる、フーコーの哲学的思考である「歴史化」と類同性を有するものであり、「再考」とともに、本論の主題である、異なるもの同士間の「美的相関性」の創造の基幹的作用である。

## 第二章 詩と音楽の「美的相関性」

ブーレーズの芸術思想と根源的に結びつくものと思料される、ニーチェの哲学的営為の基軸をなす、「価値の価値転換」や「力への意志」のテーゼは、ギリシャ悲劇を源流にもつ、詩や音楽という異なる芸術領域間の「相関性」の意義を孕んだもの、そしてそれゆえに、これに関する探究を携えたものとして捉えられる。このテーゼは、ニーチェから深く影響を受けたR・シュトラウスの交響詩や歌劇という、詩と音楽との相関的な芸術形態に直接的に反映されており、この反映は、(ニーチェやシュトラウスが生きた)19世紀後半から20世紀に巻き起こったニヒリズムやダニディズムによる、旧来の固定化された因習の破壊や合理主義社会に対する批判的指向にも見ることができる。その様相は、先在する〈他者〉に対する、ブーレーズの「再考・演繹」ないしニーチェ的「価値転換」を介して、新たな〈自己〉の存在の創造を意図した、〈芸術的人間〉の〈他者へのまなざし〉という芸術的行為によ

る、異なるもの同士間の「美的相関性」のあり様そのものにほかならない。

### 第三章 芸術表現における時間性と空間性

ブーレーズおよび、彼と強く共鳴する考え方をもち、クレーとヴァーグナーによる、時間と空間とに関する論考は、異領域・異分野間の「相関性」の探究をともなつたものと捉えられる。音楽家や画家が、みずからの表現媒体として言語をも援用しているのは、彼らの思考が単に芸術の範疇に留まるのではなく、彼らによって、より広い領域の〈他者〉や社会への（直接的）伝達が重視されているゆえんであるといえる。彼らによる、時間と空間との相関的な関係づけの仕方が示唆するものとは、新たな〈自己〉の存在（作品）の創造を可能にする、先在する〈他者〉との「相関性」としての、〈芸術的人間〉の倫理的生の遂行である。

### 第四章 新ヴィーン楽派による伝統性と近代性

ブーレーズの作品に多大な影響をあたえた、新ヴィーン楽派の作曲家、シェーンベルク、ベルク、ヴェーベルンによる12音技法を用いた革新的な芸術表現は、表現主義から、ロマン主義の先にある、古典主義、そしてバロック期へと遡る、過去の歴史からの「演繹」を介するものであった。古典主義ならびにロマン主義という、伝統性（〈他者〉）からの「演繹」によって、新たに創造される近代性（〈自己〉）のあり様は、まさしく、異なるもの同士の共存（「響存」）の実現を目ざす、彼ら三人の芸術表現における人間の倫理的生の遂行そのものと捉えられる。

### 第五章 形式性がもたらす共存性

本章は、前章で取り上げたベルクの芸術表現に関する考察を補完するものである。19世紀から20世紀にかけての世紀の過渡期に生きたベルクは、生涯にわたって、みずからの革新的な作風においてロマン的要素を保持していたといわれるが、それと同時に、伝統的な音楽様式である形式性も多分に必要としていた。ベルクの歌劇《ルル》は、このような彼の芸術表現を掌る形式性が結晶化された作品である。彼の死後、未完のままのこされた《ルル》は、そのおよそ半世紀後に、ブーレーズらの献身により全三幕版として完成され、上演された。この全三幕版の完成によって、はじめて、ベルクの芸術表現における形式性への指向そのものが、異なるもの同士の倫理的な共存（「響存」）性をもたらすものであることが解明されるのである。

### 第六章 絵画における可視性と不可視性

本章と次章では、〈芸術的人間〉の〈他者へのまなざし〉を介する芸術的行為の

あり様について、より多角的な視点から検討するために、ブーレーズの芸術思想と共鳴する考え方をもつ、20世紀の思想家を取り上げる。

まず、本章では、フーコーの絵画論に注目する。フーコーは、ベラスケス、マネ、マグリットによる歴史的絵画作品に関する言表をおこなっており、そこでは、絵画の表象に存する可視的なものが言表されることによって、その表象に内包された、不可視的なものの存在が共示されている。彼にとって「見ること」とは、みずからの哲学的思考を介する歴史観と直結する行為であった。フーコーによる絵画論は、可視的なものから不可視的なものを覚知することを促すものであり、〈芸術的人間〉の〈他者へのまなざし〉の遂行としての、ブーレーズの「再考・演繹」ないしニーチェ的「価値転換」を通して、現実の世界（社会）における専制的に固定化されたものごとを原理的に問いなおす芸術的行為論と捉えられるのである。

## 第七章 「美的相関性」と「美」のあり様

哲学、文化人類学、美学という異なる思想領域から発せられる、アーレント、ジェル、ダントーが共通して論究する芸術的行為とは、前章で取り上げたフーコーのそれと同様に、いわゆる固定化された先在するものごと（芸術の定義ならびに芸術的価値）に対する、ブーレーズの「再考・演繹」ないしニーチェ的「価値転換」を図る理論的営為と実践的活動と類同的なものと考えられる。彼ら三人の思想家による、〈自己〉と〈他者〉、「芸術」と「人間（社会）」、「芸術」と「美」の、それぞれの「相関性」に関する論究を通して照射される、異なるもの同士間の「美的相関性」における「美」とは、まさしく、先在する〈他者〉へと先行的に〈まなざし〉をむけ続けることから、新たな〈自己〉の存在の創造を図る、人間の倫理的生のあり様そのものにほかならない。

## 第八章 「精神性」の形象化と美的人間形成

これまでの論究の収束点となる本章では、〈芸術的人間〉の〈他者へのまなざし〉によってもたらされる、異なるもの同士間の「美的相関性」のあり様としての「響存」の実現可能性を現実の世界（社会）に直接的にもたらすひとつの枢要な手段としての、「芸術」、「美」、「教育」の不可分な統合性に関する考究をおこなう。この試みにおいて注目する、ニーチェの思想に強く影響を受けたドイツ表現主義の芸術家グループ、「ブリュッケ」と「青騎士」による「精神性」の形象化は、みずからの内面的世界（〈自己〉）と現実の世界といえる外面的世界（〈他者〉）との相互作用を介する芸術表現であった。この「精神性」の形象化と芸術教育によってもたらさ

れる美的人間形成との相即的な関係性は、人間の倫理的＝美的生の形式的実現を可能にする、(美を介する) 芸術教育の社会的有意義性を照射するものといえる。

## 結論

これまでの諸章を通して論じてきた、「芸術的なもの」、「美的なもの」とは、〈自己〉とは異なる〈他者〉との共存(「響存」)の実現としての、「芸術的な人間のあり方」、「美的な人間のあり方」にほかならない。そこで、この〈芸術的人間〉(美的人間)のあり方(行為としての存在)をわれわれが生きる現実の世界に(直接的に)もたらす手段として、なによりもまず、(美を介する)芸術教育がこれまで以上に重視されるべきであるといえる。前章で取り上げた、「芸術」、「美」、「教育」の統合性によってもたらされる芸術教育の意義は、この教育が「思考されうるもの、思考されなければならないもの」を内包する「芸術作品」＝現実の世界という、両者の相即の認識(理解)を目ざすがゆえに、可視的なもの(先在する〈他者〉)へ先行的に〈まなざし〉をむけることを介して、そこから、不可視的なもの(存在の歴史的媒介と新たな〈自己〉存在)を覚知(創造)する、〈芸術的人間〉(美的人間)の形成にあるといえる。それは、現実の世界における、専制的に固定化された価値観によって生じるさまざまな差異を承認しつつも、それを越え、〈自己〉とは異なる〈他者〉とともに存し(相関し)続ける、異なるもの同士の「響存」のあり様としての「美的相関性」の世界の、まさしく「芸術作品」としての出現をもたらす、人間の倫理的＝美的生の形式的実現なのである。

## 論文審査結果の要旨

### I 論文の概要

本論文の目的は、異領域・異分野間の「相関性」のあり様に関する論究を通して、多元化をきわめ、しかも、領域においては閉塞化の傾向が強まっている現代の世界(社会)環境のなかで、異なるもの同士の共存の可能性を芸術—倫理的観点から検討することである。異なることが当然視される世界のなかで、互いの差異の対置によって生起する「相関性」がどのような人間—社会的有意義性を孕んでいるのか、このような問題意識のもとに、本論文では、異なるもの同士間の「相関性」のあり様そのものを、「芸術的なもの」、「美的なもの」と捉え、〈自己〉とは異なる〈他者〉とのこの「美的相関性」がもたらす「響存」(本論筆者の造語)、すなわち、異なるもの同士の倫理的共存の実現可能性について究明をおこなっている。この究明にお

いて、〈自己〉と〈他者〉との関係を、さまざまな異なるもの同士の関係に捉えなおして、異なるもの同士間の「美的相関性」の諸相を浮き彫りにしている。

その際、ライトモチーフとなるのは、「飽くことなく他者を探求する」という、〈他者へのまなざし〉をみずからの思考の基盤におく、フランスの現代音楽家ピエール・ブーレーズ（1925-2016）の芸術思想であり、さらに、ブーレーズと共鳴する考え方をもつ19世紀から20世紀にかけての芸術家および思想家にも注目している。異なる時代と社会に生きつつも、彼らの芸術思想に共通するものは、新たな〈自己〉の創造に先だつてつねに先在する〈他者〉へとむかい続ける、〈芸術的人間〉による〈他者へのまなざし〉である。これこそは、「響存」、すなわち、人間の倫理的生＝美的生の実現可能性の条件にほかならないのである。

本論文は、序論・本論（第一章～第八章）・結論から構成されている。まず、第一章では、本論の基軸となるブーレーズの芸術思想からヒントをえた概念、「響存」について解明している。これは、〈自己〉と〈他者〉とが差異を融合して一体的に存在することではなく、互いの差異を対置しあい、それを響きあわせながらともに存在するという意味の言葉であり、ブーレーズが著作や楽曲（《エクラ》）で試みる、「単一な軌道を持つ固定化した展開をも、多様性の展開をも、ともに作る」「反射／反響」を生み出す操作に基づいている。これによる、さまざまな異なる〈他者〉との「相関性」は、先在するものごとを原理的に問いなおす「再考」によって、新たな〈自己〉の存在の創造を掌るキーマカニズムとして捉えられるものである。それは、まさしく〈芸術的人間〉による、〈他者へのまなざし〉を介して、現実のもの、既存のものとしての先在する〈他者〉からの「演繹」を図る芸術的行為のあり様そのものにほかならない。ブーレーズによるこの「演繹」という操作は、彼の芸術思想と強いシンパシーで結ばれる、フーコーの哲学的思考である「歴史化」と類同性を有するものであり、「再考」とともに、異なるもの同士間の「美的相関性」の創造の基幹的作用である。

第二章では、ニーチェの哲学的営為の基軸をなす、「価値の価値転換」や「力への意志」のテーゼに示されているものを、ギリシア悲劇を源流にもつ、詩や音楽という異なる芸術領域間の「相関性」の探究を携えたものとして、ブーレーズによる「再考・演繹」の操作と根源的に結びつく芸術思想と解している。このテーゼは、ニーチェから深く影響を受けたR・シュトラウスの交響詩や歌劇という、詩と音楽との相関的な芸術形態に直接的に反映されており、この反映は19世紀後半から20世紀に巻き起こったニヒリズムやダンディズムによる、旧来の固定化された因習の破壊や合理主義社会に対する批判的指向にもみることができる。その様相は、先在する〈他者〉に対するブーレーズ的「再考・演繹」ないしニーチェ的「価値転換」により、新たな〈自己〉の存在の創造を図る、〈芸術的人間〉の〈他者へのまなざし〉という芸術的行為を通しての、異なるもの同士間の「美的相関性」のあり様そ

のものである。

第三章では、ブーレーズと、彼の芸術思想と強く共鳴する考え方をもつ、クレールとヴァーグナーによる、(一般的には異なる観念と考えられる)時間と空間とに関する論考を、異領域・異分野間の「美的相関性」の探究をともなったものと捉えている。彼ら三人の芸術家による時間と空間との「相関性」の探究から照射されるのは、新たな〈自己〉の存在(作品)の創造を可能にする、先在する〈他者〉との「相関性」としての、〈芸術的人間〉の倫理的生のあり方である。

第四章では、ブーレーズの作品に多大な影響をあたえた、新ウィーン楽派の作曲家、シェーンベルク、ベルク、ヴェーベルンによる12音技法に基づく革新的な芸術表現を、表現主義から、ロマン主義の先にある古典主義、そしてバロック期へと遡る、過去の歴史からの「演繹」を介するものとして捉えている。古典主義、ロマン主義およびバロックという伝統性(〈他者〉)からの「演繹」によって、新たに創造される近代性(〈自己〉)のあり様は、まさしく異なるもの同士の共存(「響存」)の実現を目ざす、彼らの芸術的表現による生の遂行そのものといえる。

第五章は、前章で取り上げたベルクの芸術表現に関する考察を補完するものである。19世紀から20世紀にかけての世紀の過渡期に生きたベルクは、生涯にわたって、みずからの革新的な作風にロマン的要素を保持していたといわれるが、それと同時に、伝統的な音楽様式である形式性も多分に必要としていた。ベルクの歌劇《ルル》は、このような彼の芸術表現を掌る形式性の結晶化であるが、未完のままのこされた。《ルル》は、後に、ブーレーズらにより全三幕版として完成され、この全三幕版によって、はじめて、ベルクの形式性への指向そのものが、異なるもの同士の芸術的な共存(「響存」)の可能性をもたらすものであることが解明されている。

第六章と第七章では、〈芸術的人間〉の〈他者へのまなざし〉に基づく芸術的行為のあり様について、より多角的な視点から検討するために、ブーレーズと共鳴する考え方をもつ、20世紀の思想家を取り上げている。まず、第六章では、フーコーの絵画論に注目している。フーコーは、歴史的絵画作品を論じるに当たり、これらの絵画作品の表象に存する可視的なものを言表することによって、その表象に内包された、不可視的なものの存在を共示している。フーコーにとって「見ること」とは、みずからの哲学的思考に基づく歴史観と直結する行為である。フーコーによる絵画論は、可視的なものから、そこに内在する「底知れぬ」不可視的なものを覚知することを促し、まさしくブーレーズ的な「再考・演繹」を通して、現実の世界における専制的に固定化されたものごとを原理的に問いなおす芸術的行為論と捉えられる。

第七章では、哲学、文化人類学、美学という異なる思想領域の、アーレント、ジェル、ダントーが論究する芸術的行為を、フーコーと同様に、固定化された先在するものごと(芸術の定義ならびに芸術的価値)を原理的に問いなおそうとする、

〈芸術的人間〉の〈他者へのまなざし〉を介した理論的営為と実践的活動であると捉えている。彼ら三人の思想家による、〈自己〉と〈他者〉、「芸術」と「人間（社会）」、「芸術」と「美」に関する論究を通して照射される、異なるもの同士間の「美的相関性」における美のあり様とは、まさしく、先在する〈他者〉へと先行的に〈まなざし〉をむけ続けることから、新たな〈自己〉の存在の創造を図る、人間の倫理的生のあり様そのものにほかならない。

これまでの議論の収束点となる第八章では、〈芸術的人間〉の〈他者へのまなざし〉によってもたらされる、異なるもの同士間の「美的相関性」のあり様としての「響存」の実現可能性を現実の世界（社会）に直接的にもたらすひとつの枢要な手段としての、「芸術」、「美」、「教育」の密接不可分な統合性に関する考究をおこなっている。ここで注目する、ニーチェの思想に強く影響を受けたドイツ表現主義の芸術家グループ、「ブリュッケ」と「青騎士」による「精神性」の形象化は、みずからの内面的世界（〈自己〉）と現実の世界といえる外面的世界（〈他者〉）との「相関性」による芸術表現である。この形象化と、芸術教育が可能にする美的人間形成との相即的な関係性は、人間の倫理的＝美的生の形成を可能にする、（美を介する）芸術教育の社会的有意義性を照射するものといえる。

結論では、本論諸章を通して論じてきた、〈自己〉とは異なる〈他者〉との共存（「響存」）の実現としての、「芸術的な人間のあり方」、「美的な人間のあり方」をわれわれが生きる現実の世界にもたらす手段として、なによりもまず、（美を介する）芸術教育がこれまで以上に重視されるべきであることを確認している。「芸術」、「美」、「教育」の統合性に基づく芸術教育の意義は、「思考されうるもの、思考されなければならないもの」を内包する芸術作品の究極の姿は現実の世界であるという認識のもとで、可視的なもの（先在する〈他者〉）へ先行的に〈まなざし〉をむけ続けること、すなわち、ブーレーズの「再考・演繹」を介して、そこから、不可視的なもの（存在の歴史的媒介と新たな〈自己〉の存在）を覚知（創造）する、〈芸術的人間〉の形成にあるのである。この形成こそ、現実の世界における、専制的に固定化された価値観によって生じるさまざまな差異を超越し、〈自己〉とは異なる〈他者〉とともに存し（相関し）続ける、異なるもの同士の「響存」のあり様としての「美的相関性」、かくいわれる人間の倫理的＝美的生の実現のための存在論的条件なのである。

## II 審査結果報告

人間の倫理的な、共同的あり方の理論的探究は、これまでに数多くなされてきているとはいえ、いまだ成案をみていない。この試みは一種閉塞状況に陥っている観

がなきにしもあらずである。本論文は、書く指揮者にして作曲家たるピエール・ブーレーズの芸術思想の検覈を基軸にして、そこから摘出された「先在する他者からの演繹を介する新たな自己の創造と、それによる異なるもの同士の「響存」としての「美的相関性」の実現」という視点から、19世紀から20世紀にかけての芸術家、思想家の表現活動と思想を論究しつつ、この探求に一石を投じようとする労作である。

オーソドックスな倫理学プロパーに収まらない、著者の研究方向が、審査員全員から高く評価された。この方向は、多領域にまたがる文献を渉猟しつつ、著者みずからの枠組みで捉えなおすという一貫性として貫かれている。――他者が先在するという事は、さしあたり、異なる個がばらばらに存在しているということであり、そこにはなんの予定調和も、強度の一致も想定されてはいない。しかし、そのばらばらの個同士のあいだに相関関係が生みだされる。それは、ちょうど、ばらばらの音同士が、同一性のもとに集合するように強制されてのことではなく、有機的に響きあうことによってであるというのが、著者の主張であり、それが「響存」である。一見雑居状態とみなされがちな20世紀の芸術運動および思想展開のなかにその響きあいの確かさを、著者は求めていく。著者の、このように芸術運動の多くの場面を横断する能力と多様な思想的関心を集約させてゆく能力による手法と成果に高い評価があたえられた。

また、たとえば、ブーレーズに関する考察がフルトヴェングラーとの対比の可能性を孕んでいること、クレーの造形思考とブーレーズとの関連性の剔出および新ウィーン楽派の芸術観の検討が説得力をもち、貴重な論点がいくつも提出されていること、さらに、文献の周到な配視に基づくこうした芸術論の展開が平面的なものになることなく、つねに人間存在へ視線をむけていることによって、論文全体に芸術と人間との一体観、そして立体観があたえられていることが、とりわけ優れた点として指摘された。

他方で、検討すべき点も指摘された。題材として選択したものが芸術の多くの分野、さらに哲学の分野におよぶものであるがゆえに、ともすれば集中力に温度差が生じている点が残念なところであること、多くの芸術家、思想家を「響存」という観点で見通す際に、それぞれの固有な文脈が背後に退いてしまっているようにみえるゆえに、歴史研究とは異なる、理論研究一般の弊ではあるかもしれないが、もう少し各々の芸術家、思想家にとっての個別的問題をも内在的にくぐり抜け、各々間の種差性が示された上で、収斂点としての「響存」が解明されていれば、より説得力が増したであろうこと、などが指摘され、さらに、芸術的行為と倫理とのより精緻な関係設定、「響存」のなかでの善悪の問題の位置づけなどが、つぎの課題として示された。

このように未展開な部分を残しているとはいえ、しかし、本論文が着実に創意に満ちた思考の展開によりこれからの研究の十全なる礎を構築したものであり、さらに斯界の枢要な個別的諸問題の新たな論及の可能性をも開くものであることについて、審査員全員の一致をみた。

以上の審査結果を踏まえて、本審査委員会は全員一致で、本論文が博士論文としての水準を有するものであると評価し、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものとの結論に達した。